

# ごあいさつ



富士通アクセス株式会社

代表取締役社長 武市 博明

新年あけましておめでとうございます。

ネットワークでは、2004年秋の日本電信電話株式会社（NTT）様の中期経営計画に代表されるブロードバンド・インフラストラクチャーへの明確なターゲットを得て、2005年はブロードバンド化の進展が一層明確になりました。加入者数で見ても、2005年6月の時点でADSLが1400万人、FTTHが340万人、CATVが300万人、ブロードバンド加入者の全体では2000万人を越える普及となっています。世界で最も高速の通信インフラを最も安価に利用できるのが日本である、といってもいまや過言ではありません。あきらかに日本はブロードバンド先進国であり、とくにファイバー・インフラ（FTTH）では群を抜いて世界をリードしています。FTTH関連の技術開発に挑戦し、それを商用フィールドで実証するのに最適の環境に日本はあります。そして日本での実績は続いてワールドワイドでのビジネス競争力に確実につながるものとなるでしょう。

弊社は、従来よりブロードバンド・ネットワークの足廻りを実現するアクセス・システムの技術開発および製品展開に取り組んできましたが、ここにさまざまなバリエーションをカバーできる製品系列がそろい、通信品質をサービスに応じてダイナミックに制御する技術の具現化により、いわゆるユビキタス・コンピューティング、ユビキタス・ネットワークの進展に寄与できる体制が整ったと考えております。

ラスト・マイルの次世代技術として現在、戸建加入者向けにはGE-PONが定着しつつあります。集合住宅向けには、建物までをメディアコンバーターで運び、そこからVDSLを用いて建物内を配信する方式が有力です。また、アクセスに要求される機能は、ラストマイルを中心に上下に広がりを見せてきています。宅内ONUの更に宅内側にはゲートウェイが設置され、種々の情報家電インターフェースを集約し、キャリア・ネットワークに統一的な終端点を提供します。局側OLTの上位にはレイヤ2スイッチやCWDM機器を配して、中継網へのアグリゲーションを担います。たとえば10G速度のCWDM装置はその最新の成果です。それらもあわせ、アクセスシステムの一環として製品展開をしております。

本号巻頭では、ここ数年のブロードバンドの進展を振り返り、過去から未来へと続く流れを一望します。ブロードバンド黎明期からのADSLの発展を総括し、メタルからファイバーへの流れのなかでFTTHの将来を展望し、あわせて弊社の取組みを俯瞰します。続いて個々の製品開発についてご紹介いたします。

弊社のもうひとつの事業の柱である、パワーエレクトロニクスの分野では、ガソリンに代表される化石燃料の高騰を受けて、より省エネルギー化を実現する移動手段の実現技術が注目を浴びています。ハイブリッド車はもっともホットなトピックのひとつですが、いち早く取り組んできた弊社のこの分野での最新の成果もあわせ収録しました。

ぜひご高覧いただきより一層のご指導ご鞭撻を頂くようお願い致すとともに、本年の明るい幕開けをお祈り申し上げます。